

知求会ニュース

2009 年 4 月

第 29 号

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2009 年 3 月 24 日(火曜日)午後 1 時 10 分から国際学部 A 棟 4 階大会議室にて、2008 年度学位記手渡し式が開催されました。

今年度の修了生は、国際社会研究専攻 森 三奈さん、王 品珍さん、河田裕親さん、グエン ティー タン ハンさん、呉 鳶さん、聶 磊さん、孫 娟さん、崔 寶允さん、王 宝玉さんの 9 名と国際文化研究専攻 稲嶺麻希子さん、郭 旭茹さん、呉 艾彌さん、史 欣悦さん、張 新麗さん、堀江賢一さん、松原真実子さんの 7 名、そして、国際交流研究専攻の 錢 玉蘭さん、仲田和正さん、西浜佳子さん、半澤典子さん、遠藤 歩さん、大谷桂子さん、薩 日娜さん、根本久美子さん、橋爪亮太さん、茂櫛 勉さん、芦 暁博さんの 11 名で、計 27 名でした。今年度の修了生の主な進路は進学 4 名です。就職状況は、現在調査中です。17 年度より、学業優秀者に贈られる宇都宮大学奨学金(奨励賞)に、国際学研究科の 1 名として芦 暁博(国際交流研究専攻)さんが受賞されました。

◎ 博士後期課程、進学おめでとうございます！

呉 鳶(国際社会研究専攻・9 期生)さんが、2009 年 4 月から早稲田大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 社会環境科学研究領域に進学されます。

今井淳雄 (国際交流研究専攻・2 期生)さん・仲田和正 (国際交流研究専攻・3 期生)さん・崔 寶允(国際社会研究専攻・9 期生)さん・芦 暁博(国際交流研究専攻・4 期生)さんの 4 名が宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻に進学されます。

◎ 岡田三郎国際学研究科長・国際学部長選出

岡田三郎先生が 4 月 1 日から任期 2 年間で選出されました。詳細は掲載記事紹介 3・4 を参照して下さい。

◎ 渡邊直樹理事・副学長に選出

渡邊直樹先生が 4 月 1 日から任期 3 年間で選出されました。任期中の後任には、公募で高橋 優先生が着任されました。

◎ 教職員人事異動

北島 滋名誉教授

地球社会形成研究講座の北島先生が 3 月 31 日付で定年退職されました。宇都宮大学には 1983 (昭和 58) 年 10 月から在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。

片桐雅義 名誉教授

地球社会形成研究講座の片桐先生が3月31日付で定年退職されました。宇都宮大学には1974（昭和49）年4月から在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。

柏瀬省五 名誉教授

国際文化交流研究講座の柏瀬先生が3月31日付で定年退職されました。宇都宮大学には1999（平成11）年4月から在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。後任には公募で、**湯澤伸夫**先生が着任されました。

間遠伸一郎 講師

地球社会形成研究講座の間遠先生が3月31日付で退職されました。間遠先生は、国際学部開設から14年間、講師として今日の国際学部の発展を支えられました。永い間、お疲れ様でした。

小川由美子 総務係長

国際学部事務部総務係長の小川由美子さんが4月1日付で財務課に人事異動されました。係長は国際学部には2年間在籍されていました。裏方として国際学研究科・国際学部の事務を円滑に、かつ前進的に采配されてこられました。在籍期間中は本当にお疲れ様でした。後任には、工学部から**大野和隆**係長が着任されました。

吉川 稔 専門職員

国際学部事務部専門職員の吉川 稔さんが4月1日付で工学部に人事異動されました。吉川さんは国際学部には4年間在籍されていました。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。在籍期間中は本当にお疲れ様でした。後任には、契約室から**久野秀和**さんが着任されました。

◎ 2月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 4名・社会人 1名・外国人2名 計7名

国際文化研究専攻 一般 1名・社会人 0名・外国人2名 計3名

国際交流研究専攻 一般 1名・社会人 3名・外国人 0名・

国際交流・国際貢献活動経験者 4名 計 8名 合計 18名

◎ 平成20年度 第2回 各学部等同窓会連絡協議会報告

平成21年2月14日(土)午後3時から、大学本部棟3階第2会議室にて、平成20年度第2回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は菅野長右エ門 学長・水本忠武 理事・海野 孝 理事・山本純雄 理事・鹿野芳郎 理事の大学側5名と事務局担当者9名、

吉葉恭行 国際学部同窓会会長・毛塚有美 同副会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・安達久博 工学部同窓会副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長・田中秀幸 同理事長の同窓会側 9 名でした。議事内容は、検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。会議終了後、旧講堂の見学を行いました。午後 4 時半過ぎから、大学会館談話室にて懇親会を開催し、大学本部と各学部等同窓会の懇親を深めました。

◎ 旧講堂改修落成報告

平成 21 年 3 月 17 日(火)午後 1 時半から、旧講堂にて、大学内外関係者 120 名の参加のもとに改修記念祝賀会が行われました。主な内容は、菅野学長挨拶・感謝状贈呈・来賓祝辞・水本理事説明、宇都宮大学管弦楽団による弦楽四重奏と教育学部音楽教育講座教員による記念演奏です。旧講堂の木造建築にあったフォーマルなクラシック演奏はこれからの旧講堂の活用の可能性を示す素晴らしい演奏会でした。懇談会では乾杯に続き宇都宮大学軽音楽研究会によるジャズ演奏がありました。リラックスしたジャズ演奏を楽しみながら懇談され、旧講堂が宇都宮大学のシンボルとなることを祈念します。補修工事の様子は、大学 HP (<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/news/2008/repair-work.html>) をご覧下さい。

◎ 「多文化共生について考える」連続市民講座 VOL.2 開催

2009 年 1 月 23 日(金)に、国際学部 E 棟 3 階 1353 教室にて、午後 1 時からの第一部では、「多文化共生時代に生きる子どもたち」ーいま教育現場で起こっている様々な外国人児童生徒を取り巻く問題について事例を挙げながら問題提起するーが開催されました。報告者は、**原田真理子**(佐野市日本語指導員・宇都宮大学ポルトガル語講師) 先生でした。午後 2 時 30 分からの第二部では、「国際学の構築に向けてーワーキング・プアの分析を事例にしてー」が**北島 滋**(宇都宮大学国際学部長 地域社会学) 先生によって講演されました。

* 『HANDSーとちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007 年 9 月 20 日に、ニュースレター『**HANDS**』第 1 号が発行された後のニュース発行についてお知らせします。

第 5 号(2008 年 12 月 15 日) 「日系ペルー人の子どもたちの帰国後の教育・生活状況について」 国際学部 **スエヨシ・アナ**

「栃木県立県央高等産業技術学校高等部の紹介」 県央高等産業技術学校 **吉澤尚幸**

「真岡発、「バーベキュー交流会」ー外国人児童生徒及び保護者交流会ー 真岡市立真岡西小学校 **佐藤和之**

「栃木県内の小学校で日本語指導ボランティアを始めて」 宇都宮大学大学院 **遠藤 歩**

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞(平成 20 年 12 月 22 日発行)に、**中村 真**先生らが出張講義した記事が「大学授業 進路に生かす 大田原女子高で「出張講義」 宇大教授ら講師に招く」として掲載されました。
2. 下野新聞(平成 21 年 1 月 19 日発行)に、「さくら 宇大留学生を名所案内 体験学習を通じ国際交流」の記事の中で留学生センターの**若山俊介**先生のコメントが掲載されました。
3. 下野新聞(平成 21 年 1 月 23 日発行)に、**岡田三郎**先生らの記事が「宇大 工学研究科長に井本氏 国際学部長は岡田氏」として掲載されました。
4. 下野新聞(平成 21 年 2 月 6 日発行)に、**岡田三郎**先生の国際学部長就任記事が「この人」欄に掲載されました。

◎ 国際学部だより

下野新聞(平成 20 年 9 月 22 日発行)に、「宇都宮 国際舞台で活躍を 宇大が人材育成セミナー」の記事の中で国際学部 1 年**力田萌瑞(ちからだ・もえみ)**さんのコメントが掲載されました。

下野新聞(平成 20 年 11 月 4 日発行)に、「宇大生の無料誌 好調 きょう第 5 号」の記事の中で国際学部 4 年**ハツ役(やつやく)みなみ**さんのコメントが掲載されました。

読売新聞(平成 20 年 12 月 10 日発行)に、「宇大に「就活応援団」 内定者が相談イベント」の記事の中で国際学部 4 年**粕谷直洋**さんと同 3 年**田中 俊**さんのコメントが掲載されました。

研究室訪問 20 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 20 回目には、地球社会形成研究講座所属の**北島 滋**先生にお願いしました。文章は最終講義の内容になっています。

「33 年間の研究と教育生活を振り返って」

北島 滋

1. 私の研究を振り返って

33 年間の研究と教育を振り返るにあたって、研究生活を支えてくれた妻、今は亡き父母、職場の同僚、学生・院生諸氏に感謝を申し上げたい。

私は、法政大学北川隆吉教授の下で研究をスタートしました。私は商学部出身で社会学の「社の字も」知らず、北川研究室の門下生になったわけです。

北川先生は調査研究を主体とした実証研究でした。今でも研究会で言われるのですが、「横を縦にするだけが研究ではない、フィールドで何か新しい知見の一つでも持ってこい」と。これが私の DNA に組み込まれて、現在に至っています。理論的には、マルクス主義の考えに強く影響されたことは事実です。当時の思想状況は学園紛争ということもあり、マルクス主義の影響を受けた社会学は異端あるいは傍流でしたね。当時主流であったタル

コット・パーソンズ(1902~79)に関心を持ち、しゃくだったので、ちょっとかじってみました。というのは「パーソンズを知らなければ社会学の素人」という時代の雰囲気でしたから、私も影響されたわけです。この影響は、今でも分析の際に、全体の均衡的な構造と機能を意識して(構造機能分析)、規程的な要因を考える。ただし、概念を十分理解できなかったせいか、消化できたとは言えませんでした。不勉強でしたので、これからもう一度読んでみようかなと考えています。

具体的な研究の出発は、自治体の合理化と労働者問題、確か広島市役所の調査でした。何も知らずに、広島市に連れていかれて、放り出されましたが、事前に研究会で勉強して、ヒアリング項目を整理し、市役所内を駆け巡りました。この時、中央集権システムで動く日本の社会(自治体を含む)が中央政府・省庁が策定した全国総合開発計画等の国家計画によって大きく変動する、この認識をおぼろげながら持ちました。(「新全総・広域行政と自治体合理化」1969年、現在の道州制論の端緒)。この認識方法が後の「構造分析論争」に引き継がれていくわけです。

1960年代後半から70年代にかけて公害がらみの住民運動等の地域問題と理論研究ということで、国際学研究科の大学院生と同様、やや股裂きのようなことになりつつ研究に従事していました。

1976年4月から、旭川大学経済学部へ赴任しました。就職で苦戦しつつ、子供もいましたので東京に残ることをあきらめて郷里の旭川大学で地域研究所の創設に関わりながら、地域問題の研究に従事しました。北海道は、＜職＞の問題(産業振興による労働市場の拡大)を抱えており、苫小牧東部港開発がオイル・クライシス以降苦境に立たされ、企業立地が進まず閑古鳥が鳴いている状況でした私が調査した時には鹿の群れが2グループ住みついていました。世界の工業団地でこのような状況は聞いたことがありません。したがって、苫東開発は陸奥小川原湖開発と同様巨大な負債を抱えて倒産しました。

当初、旭川、北見の地場産業である家具産業の調査を行いました。ここから現在まで続く地域の産業問題に従事するきっかけとなりました。私は家具問屋の息子でしたので、中野卓『商家同族団の研究』のように、ある意味で参与観察的手法の研究ができました。私自身は良くできた研究だと思いますが、あんまり評価はされませんでしたね。特に企業集団化を牽引した父親の運動の理念に着目しました。マックス・ウェーバー(1864~1920)の行為論で、理念が行為に大きな役割を有するという＜主意主義的行為論＞にあらためてリアリティを感じました。(『開発と地域変動』東信堂、1998再録)

もう一つは、企業城下町が急激に崩れていく状況を、下川町(銅鉾山)を事例にして、学生達と調査を4年ほどした経験があります。この調査研究は、「地域社会の変動と地域組織の動態」(1, 2, 3, 1982, 83年)としてまとめましたが(『開発と地域変動』東信堂、1998再録)、未完成のまま宇都宮大学に赴任しました。ただこのとき、知己を得た旅館の主人からその地域に＜根付き＞、そこで＜よりよく生き抜く＞という考え、＜根付きの思想＞(研究者にとって重い課題なのですが)を教えられました。

1983 年 10 月、宇都宮大学教養部に縁あって赴任しました。有り余る時間を、研究と教育と飲み会にというのは不謹慎ですが、この当時は研究に没頭しました。北川教授の企画する中央法規出版の「講座もの」の刊行に参画し、道産子育ちの私に、造船産業の技術革新と労使関係の分析課題が与えられました。これは当時 ME 化が造船産業でどのように取り入れられ、労働、労使関係にどのような変化を与えているのかという研究課題でした。おかげで船の造り方は頭の中では可能となりました。南は三菱重工業香焼造船所、そして横須賀市追浜の住友重機、静岡県清水市（現静岡市）の中小造船所を見学、聞き取り調査をしました。介添え役は、少数派の全造船労組でした。旭川時代もそうでしたが、こちらに来てても労組との関係が継続されました。その成果が『ME の時代・造船産業のレクチャー』（中央法規出版、1986）です。ここでは、「座談」を活用したりして、働いている者からの視点と主観を重視する方法を意図的に採用しました。この時は、私は旭川大学時代の労組を乗っ取って闘った民主化闘争の経験が蓄積されていて、労働・労働組合運動とシンパシーを持てる感受性がありました。ともあれ 10 年ほど労使関係の研究に入り込んでいきました。しかし労働運動の展望（自分自身の研究面の方向性）が見いだせないのと企業側への調査が困難、そして労使関係の研究の難しさから撤退しました。難しさというのは、労使紛争を研究の対象にすると、対象にシンパシーを持てば持つほど、その存在の重さに耐えられなくなるということでしょうか。

もちろん労使関係の研究から一つの成果を得ました。地域への企業の立地が地域開発の視点から極めて重要だということは、北海道時代に強く意識して研究していたのですが、宇都宮に来て、企業が絶えず立地するという状況に直面し、東京圏、首都圏という地理的位置と産業政策（国家計画）による交通体系等の産業インフラの整備を強く意識しました。ここから、産業・労働社会学と地域社会学をクロス・オーバーさせた研究に移行（「東京圏機能の拡大と地域変動」1992 年）しました。

1995 年、短期在外研究から帰国後、地域社会学学会の地域研究方法論争に参画しました。北川先生の代貸（ヤクザみたいですが）として、地域社会学学会の研究会に呼ばれて発表したのですが、互いにけんか腰でした。北川先生は「なぜ俺たちの成果を学会は無視をするのだ」と怒りを前面に出していました。論点は、日本の資本主義の構造を前提にすると、地域社会の分析に国家計画、産業、技術革新等の要素を組み込むべきというのが私たちの主張で、そうしないと、どの地域がどのような要因で変化するかを見極められないまま、住民が変動の波に巻き込まれる。もっと上記要因を批判的に分析すべしということで、私はこの分析方法を批判的構造分析と名付けました（「地域分析的方法的展開」1997）。あのあてにならないウイキペディアに出ています、北川先生の箇所に。ウイキペディアに私の名前も入っているのですが、中身は書いていけませんので空です。誰か書いていただければ、ネタは提供します。

大学院生との調査を含めて、安藤さんとか津國さんの修士論文を国際学部の研究論集に掲載しました。それらを論文の著作目録に入れてありますが、これらは院生の研究成果で

あり、私ではありません。彼らの作成にあたって指導はしましたが。安藤さんの「二元的代表民主主義における市民参加の展開と議会・議員活動」(2005)、津國さんの「持続可能な観光と地域振興の可能性」(2004)です。良くできた論文ですね。私も勉強させられました。安藤さんは宇都宮市市民活動サポートセンター事務局長、津國さんはグアム大学等の日本語教師で活躍しています。中国の経済地理学雑誌等に掲載されているのは付け足しで、私のゼミで修士課程を修了した賈臨宇君の論文、そして浙江工業大学唐根年教授の論文です。私が受け入れた先生ですが、よく私の授業にも、調査にも参加されていて、研究していましたね。もちろん私はファースト・オーサーではありません。お二人の論文はよくできた論文です。賈臨宇君は現在、浙江工商大学副学科長としてがんばっています。

2002年に「シリーズ世界の社会学・日本の社会学」の一つとして出版した『高田保馬』(東信堂)は、若い大学院生諸氏に送る私の遺言の書です。高田さんは日本を代表する社会学者という評価がありますが、それで文化功労者をもらった方です。私は社会学畑から研究に入ったのではないので、修論に何を書こうかと迷っていた時に、いま法政大学の教授をしている先輩から、高田をやってみたらというアドバイスを受け、それならとがんばりました。その時にパーソンズを修論の課題にしておけばという悔やみは、今でもあります。彼は社会学から経済学に移っていくわけで、京大教授、阪大教授を歴任しますが、戦後公職追放になります。貧乏論争の当の相手であった天野文部大臣から追放は間違いということで解除されます。言いたいことは、1945年以前には京都帝国大学教授として(一市井の人ではない)戦意を鼓舞する論陣を張り、戦争が終わったら突然何の自己批判もなく民主主義者の顔をして民主主義を唱える、そういう研究者の精神構造をどう評価するかです。私は一部だけを取り出してここは理論的にすごいから、という評価には与しない。その人の生きてきた軌跡、思想形成と重ね合わせて理論をトータルにとらえる。それが理論、思想を批判的、内在的に検討することだと思います。

2. 教育を振り返って

私は多くの学生、院生に恵まれ今日まで来ました。大変感謝しています。教育の原点は旭川大学時代に求められると思います。

大学民主化闘争に参加した経験が原点です。何も知らない若造が(当時32歳)、6人で学長、学部長に反逆しました。1977年の秋でした。旭川大学は倒産した後、再建の仕掛けとして、理事会、教授会、教職員会議、労働組合が一体化した組織で構成されていました。とにかくワンマン学部長の大学運営とその結果として、教育研究以外の仕事の多忙さに音をあげまして、あるきっかけで「普通の大学に戻す運動」に参加しました。仲間の筑波大の商法の教授、現在の旭川大学の学長、松坂大学の教授等、今から思えば良くやったと思いますが、そこでの経験は社会学の原点である相互に助け合う＜社会＞の発見でした。特に職員の支持なしには運動は成功しなかったと思います。宇大では職員は動かないという教員の批判を耳にしますがそれは逆だと思います。

旭川大学に入学してくる学生は、人柄は抜群ですけど勉強はいまいちでした。従ってここでは教育対象に対応した教育が必要になります。そこでの経験から得た教育方法は極めて簡単です。相手の知識水準、理解力にあわせて手間暇かけて教えるということです。

夜間の学生も教えていましたが、ほとんどが自衛隊員で、けっこう仲良くなった学生がいました。小隊の班長クラスは国防意識に燃えていましたね。教育の方針は同じです、手間暇かけて教える。JR（かつての国鉄）にお勤めで、国鉄民営化で八王子に配置転換をしてきた方とは今でもメールのやりとりをしています。

宇都宮大学教養部時代（1983～94年）も、基本は同じです。教養部時代は大教室の授業です。ゼミ生がいませんでした。ただ、農経の学生達に少人数教育をしたきっかけで、最初で最後の仲人を経験しました。昨年の12月に、彼らから鬼怒川温泉に招待されました。感激しましたね。そのうちのお一人である橋本智氏（農業経済学科卒）は研究熱心で、最近2冊目の著書『とちぎ農作物はじまり物語』（随想社）を出版しました。立派だと思いますね。

国際学部時代（1995～2009年3月）は、良き学生、院生に恵まれ、あまり苦勞もせず今日まで来ました。したがってあまり書くことはありません。講義、論文指導は手間暇かけて行い、また彼らから逆に学びながら、互いに手抜きをしない、という暗黙の了解をつくることくらいでしょうか。したがって、最後の授業科目の成績評価も立つ鳥跡を濁します。

最後ですが、私はどういうわけか学部、大学院の修士、博士課程の創設に教職員の皆様方と共にお互い助け合いながら仕事をし、また法人化請負副学長として法人化にも関わりました。今から思えば、よくまー、物好きにと思うのですが、今度生まれ変わった時は参画しないと思います。もっと楽しいことが他にあると思いますので。

先生方、職員の皆様方と一緒に作業をしました。学部創設の時は、毎日帰るのが夜中で、隣の放送大学の所長さんの鯨井先生もずいぶんホテル泊まりでよけいな出費をしたのではないかと思います。私も、妻が入院して、入院の時と、退院の時の2回くらいしか行けず、離婚されても不思議ではないというか。旭川大学時代も闘争に明け暮れた4年でしたから、本当に感謝しなければと思っています。4月に、パラツキー大学に集中講義に一緒に行く予定ですが、たぶんこれだけでは罪滅ぼしにはならないと思います。

今日は本当にお忙しい中来ていただきましてありがとうございます。心より感謝申し上げます。

（2009年3月6日原稿受理）

博士録 05 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第5回目には昨年の秋に東京農工大学連合大学院 連合農学研究科 博士課程(後期3年のみ) 生物生産学専攻で学位取得した、北島研究室 OB の吉川光洋（国際社会研究専攻・第4期生）さんをお願いしました。

「博士課程修了までの道のり」

パルシステム生活共同組合連合会 商品統括本部 産直事業部 吉川 光洋

国際学研究科および国際学部の皆様、お久しぶりです。

2009年3月で宇都宮大学国際学部を退官されました北島滋先生の研究室を卒業後、東京農工大学大学院連合農学研究科の博士課程に進学しました吉川光洋です。2008年9月に博士課程を修了し、博士（農学）の学位を授与されました。現在は東京都内にてパルシステム生活協同組合連合会に勤務しながら研究活動を継続させております。実は博士課程2年次（D2）に本同窓会の記事を書き、「このままスムーズにいけば3年で修了できる（予定）」という内容の記事を書きましたが・・・思うようにはいかず4年半の歳月を費やすこととなりました。

「修了」、「学位授与」といえば一言で終わってしまっていますが、この間にはさまざまな苦労がありました。自分自身の努力だけでなく多くの方々に支えられて得られた結果です。将来、博士課程への進学を志す方、または既に進学されており、これから博士論文を書く方もいるかと思いますので、研究内容を説明したうえで簡単に4年半を振り返りたいと思います。

まず、博士論文は「グリーン・ツーリズムの発展におけるIターン者の役割—主として岩手県遠野市を対象に—」と題し、修士論文の内容を発展させるかたちで執筆しました。近年、農村地域のもつ既存の地域資源を活用した観光、いわゆるグリーン・ツーリズムが人気を博し、同行為を介した入り込み客数が増加しています。一方で、Iターン者も増加する傾向にあり、両者の間に一定の関係があると考えられます。このような状況のもと農村地域では、従来のように地域の人材のさまざまな提案や、リーダーシップを発揮することによる内発的発展から、外部の視点を生かした「外発型」の活性化策や改善策にシフトしています。しかし、Iターン者は外部の視点を持ち、なおかつ移住した地域や人・自然の魅力を知り、それらに魅かれて移住をしてきたのに、有効な人材と見なされることがほとんどありません。

そこで、全国6地域のIターン者とそのライフスタイルを調査し、地域の内部に革新・変化をもたらす普及論におけるチェンジエージェントとしての役割を果たしていることを確認しました。そのうえで、岩手県遠野市においてIターン者56名を対象にアンケート調査、ヒアリングを行い、それぞれの生活行動（就業、余暇活動など）が及ぼす影響を分析し、Iターン者がグリーン・ツーリズムの発展に寄与し、さらには地域社会の発展へと影響を及ぼしていることを論じました。

それでは、研究生活はどうだったかというと・・・

D1のときはNPOに勤務しながらの研究生活でした。修士時代より、研究テーマに関連したNPOでボランティアスタッフをしていたのですが、博士論文に関わる情報収集や調査・分析能力も身につくことから、週に3日は都内のNPOに勤務し、残りは宇都宮で研究室にこもる生活をしていました。年間を通して実践の現場へ行く機会や、学会・研究会への参加が多く、自らの研究成果を報告する場面も多数ありました。また、論文が学会誌に掲載されないと修了の要件を満たしませんが、入学後3ヶ月で投稿論文が掲載され、初業

績という充実感も味わいました。

D2になると博士論文を意識し、執筆について指導教員に相談します。すると、基礎研究（先行研究）の不足を指摘されます。何とかこの不足を補おうとしますが、相当時間がかかり、なかなか前進できずにどうしていいかわからない状態が続きました。そんな時期に、D1に投稿していた論文の査読（審査）結果が返ってきます。この内容が指導教員から言われている内容と一致し、論文を再度投稿するために加筆・修正を行う中で博士論文に対しての対応策が見えてきます。そして、土台となる基礎部分を固めながらのゼミを行いました。ただ、試行錯誤的執筆により、大量に文章を書き、使える部分だけを残していったため、最終的には論文として使用しない、カットされた部分を多く書いたのがD2でした。

D3になると、これまで調査したデータや整理した先行研究、学会報告、投稿論文を章構成にあてはめ、加筆・修正を行って、論文の形式になるように体裁を整える作業を開始します。書き溜めた文章が膨大な量になりましたが、調整するうちに、論文の流れが揺らぎ、何度も構成を変えながら執筆した論文がいつの日か放置されていました。諦めたというか、今度はめっちゃくちゃでどうしたらいいのかわからない状態。指導教員とのゼミは不定期になり回数が減っていました。もはや12月の論文提出は頭になく、3年間で修了は考えなくなりました。このようにして、「ゆとり？」ができたことでじっくりと考え、一から整理しなおしました。と同時に学会誌を読み漁り、不足箇所を補う作業を行いました。原本が手に入らない資料は複写依頼をして遠方から資料や論文を取り寄せ、基礎資料として使用した農業白書や労働白書、国土利用白書は、これまでに発行された全てに目を通し、研究に関連する部分をまとめました。こうして博士論文が次第に整ってきました。

D4になったとき、勤務していたNPOがパルスシステム（生協）の都市農村交流事業の委託を受けていたことがきっかけとなり、NPO側ではなく、パルスシステム連合会産直事業部交流政策課に週1～2回勤務するようになります。また、今年こそ博士論文を書き上げ、提出しようと、指導教員とのゼミを週1回行います。1回のゼミはマンツーマンで4時間～6時間。博士論文を書きながら、ゼミで進捗を報告する準備。さらにそのレジュメ作成。1週間準備してゼミに臨んでも始まって5分で「ダメだね」の一言。その後、丁寧に指導していただきますが、論文を書いている当時はいっぱい、いっぱいでした。今だから冷静に振り返れますが、精神的にもきつい日々が続きました。迫る提出の締め切り。終わりの見えない論文執筆。次第に博士論文が遠い存在になっていました。ときどき電話で話す親にも「ここまで面倒をみてきてもらったがダメかもしれない」と漏らすようになっていました。「博士」を追い続けてきた自分にとっては「博士」が取れないことは「負け＝人生の失敗」と考えはじめました。人前では明るく振舞っていても、心の中では「ああ～ダメだ。ダメだ。」と思っていました。そんなとき、籍を置いていた宇都宮大学農学部農業経済学科の若手の先生から「書かなきゃダメだよ。悩んでも話にならない。書いて指導教員のところに持っていきなよ。週1のゼミじゃダメ。1日に2回持っていきなよ。もう来なくていいって言われるくらい持っていきな。それと、1箇所を指摘されたら20箇所は直して持

って行くんだよ。学部生じゃないんだからそれが当然。」と言われました。しかも、その先生は毎日何度も同じことを言ってきました。どうしても書けない状態に陥っていたので、半分聞き流していましたが、頭を空っぽにして考えれば、書くしか方法はないことに気づきます。当たり前のことですが、それが考えられない状況になっていたのです。

まあ、ダメでもこれまでの自分の書いたもの、やったことをまとめて形にしよう。そして博士論文として適切かどうかは書いた後に判断してもらおう。そう思い、毎日起きてから寝るまで必死に博士論文を書く生活が始まりました。D4の12月の提出を目指し、半年間は部屋の照明とパソコンは電源を入れたままにして仮眠をとるような生活をしていました。とにかく書くしかなく、「やらないと！書かないと！」という思いが先行し、寝ようとしても寝れず、起きては論文を書いていた。そして、何とか締め切り前に書き上げ指導教員に持って行きます。提出の可否の判断を仰ぎますが結果は×。

ここで、オーバードクターということもあり、次回に延期して再提出するか退学するかの決断を迫られます。指導教員からは、とりあえず書き上げたので、少し冷却期間を置いて、再度書き直すことを勧められます。このとき、博士論文のことよりも、今後進むべき道のことを考えました。やりたいことは沢山ある。でも、自分が出来ることは何か？博士課程に残って博士論文を書き、学位取得後も研究生などをしながら学会報告を重ね、研究職の公募を受けることが自分の進むべき道であり王道と考えていました。先が見えないという不安と、現場に出てみたいという思いがあったので、他の道を模索します。グリーン・ツーリズムの実践者として地方のNPOや観光協会に勤務しながら研究を続けるか・・・そんなとき、パルシステム連合会で職員を募集します。研究テーマとも関連しており、所属していたNPOの業務も行っていることから、これまでの人間関係も引き継ぐ形になるので、試験を受けて内定をいただきます。内定前も後も、正直この道がいいのか、他の道がいいのか迷いましたが、とにかく環境を変えてやってみようと就職。

4月からは宇都宮に家を借り、東京にもマンションを借り、月～金は社会人、土日は学生という生活を開始します。就職したばかりで仕事にも慣れず、覚えることがたくさんあるなかでの博士論文の執筆。毎日仕事の後に夜中3時まで論文を書き、週末に指導教員とのゼミを実施。そこでも「ダメ！」、「書き直し！」の繰り返し。辛かったです。正直「もうダメかな？」、「諦めようかな？」と考えながら、ひたすら書いて、書いて書きまくりました。悩んだら書いて、頭にきたら書いて、沢山書いて満足したら書いての繰り返し。

二重生活は続き、終わりが見えず、どうなることかと考える毎日。9月修了（学位取得）のための論文の提出締め切りは6月末。「もうダメでもいいよ！」と考えながらゼミをやっていると指導教員から「まだまだ直さないとダメだが、締め切りが近いからそろそろまとめないとなあ」と言われる。うれしいというか、信じられない気持ちだった。そして提出。

指導教員、副指導教員を含む5名に博士論文を提出し審査を受け、東京農工大学にて200人以上の教員による審査と投票を経て博士（農学）の取得が決定しました。

もし博士課程へ進学を考えている、または博士課程に進学した後輩がいたら、個人的な意

見ですが、以下のアドバイスをしたいと思います。

①どんな些細なことでもメモし、文章化して（パソコンに打ち込んで）残すこと。これが悩んだり焦ったり、データが足りないときの糧となります。

②今の自分に何が必要で何をすべきか、逆算して考えてください。3年で修了するということは、3年目の12月に博士論文を提出しなくてはなりません。12月に提出ということは、3ヶ月前の9月には指導教員、副指導教員には完成版を見せてなくてははいけません。さらに、論文が5章構成と考えると・・・残された時間は・・・ということです。

③先行研究・基礎研究の重要性。博士論文は大きなピラミッドです。より大きく作るには底辺（基礎部分）が大きくなってはなりません。基礎があつてこそその応用であり、博士論文としてオリジナリティのある展開にすることへつながります。

それと、自分では「博士」とか「学位」とか気にしていますが（博士課程に進学して学位取得を目指すので当たり前ですが・・・）、周囲はそれほど気にしていません。また、悩んで誰かに相談しようとしても、博士課程のことを理解できる人が少ないので、大して参考になる意見ももらえません。学位が取得できない結果に終わっても、それだけが結果ではありません。日本人では進学しても学位を取らない方が半分くらいではないでしょうか？辞めて後悔するなら辞めない。辞めないなら頑張ってください。とにかく先が見えないし、周囲の圧力や精神的な苦痛で折れそうになりますが、学位取得は才能ではなく努力なので頑張れば誰でも可能だと思います。

さらに、学位取得と就職は必ずしも一致しないことは覚悟が必要です。「博士の学位は足の裏のご飯粒と一緒に」とよく言います。取らないと気になりますが取っても食べられません。通常は医学部以上の在学期間で、学位取得時は30歳近いものです。しかし、「博士」の学位だけでは食べてはいけません。この点は考えどころです。

ただ、こんな面もあります。アンコールワットの修復で有名な上智大学学長の石澤良昭先生とお話した際に、『「博士」の称号は重いよ。日本ではそれほどでもないけど・・・海外に行けば男性はミスター、女性はミスまたはミセスを名前の上に付けて呼ばれる。でも博士は常にドクターを付けて呼ばれるからね。それほど名誉なことであり重いんだよ。』と言われました。

話が長くなってしまったのでこの辺で終わりにしたいと思います。学位取得に至るまでお世話になりました国際学部の先生方に感謝するとともに、国際学研究科および国際学部の皆様のご活躍をお祈りいたします。

（国際学研究科 国際社会研究専攻 第4期修了生）

（2009年4月6日原稿受理）

知究人 09 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー（**ちきゅうびと**）を設けました。第29号の第9回目は、東京大学大学院 博士課程 総合文化研究科に進学されている丁研究室 OG の**李 賢峻**さんをお願いしました。

「(近況報告) 研究者を目指して進んできた道、まだまだ進行中。」

李 賢峻

宇都宮のみなさま、こんにちは。国際学部の6期生 李 賢峻と申します。2004年3月に国際学部を卒業して、翌年に東京大学大学院・総合文化研究科（比較文学比較文化分野）に進学しました。今年から博士課程3年次になります。比較文学を研究する上で主軸を立てるべく修士課程では日本の近代文学を中心に研究しました。そして「明治大正期の女流文壇における樋口一葉の影響と受容」という題目で修士号をいただきました。博士課程では、日韓比較文学比較文化を本格的に取り組みたいと思い、「半島の舞姫・崔承喜^{チェ・スンヒ}と日本の昭和文芸について」研究領域をさらに広げております。

今、振り返りますと宇都宮時代は、ちょっと長くなっている私の留学生活の中で、とても充実した日々だったように思います。講義やゼミに積極的に参加し、それに負けじと、たくさんの友達を作って、お腹いっぱい笑ってはしゃいでいました。思う存分キャンパスライフを楽しんでいたように思います。宇大の、特に国際学部の良さは、先生と学生のコミュニケーションが非常に自然に取れるところではないかと思います。その恩恵をまろに受けることができた私は、今もなお学問を追及していくことに大変喜びを感じております。

卒論ゼミは、指導においては厳しく、抜かりのない丁貴連先生の下で、日韓の近代小説を比較した「近代韓国における「恋愛」の発見」という題目で卒業論文をまとめました。丁先生のゼミを選んだ理由は、明快で分かりやすい説明で授業を進める先生の魅力と、さらに緻密に用意されているレジュメに感動して、一年生から「朝鮮語」以外の授業には全て出ておりました。そのため卒論ゼミとして入ることに、何ら迷いありませんでした。丁ゼミの運営は先生のご指導のみならず、院生や学部生が交じり、上下を不問にして、ゼミ生同士の活発な議論を通じて、互いに切磋琢磨していける雰囲気が整っていました。そのため、仲間の結束力ももう一つ大きな力となり、ますます卒業論文に真剣に取り組むことができたと思います。この1年間の先生の指導やゼミを通して私は、比較文学研究の土台を作ることが出来ました。

国際学部の特徴として、言語、文学、哲学、宗教、歴史、さらに社会、経済、政治などなど、多岐に亘る学問に接します。しかし、いざ卒業論文を書くとなると、自分の適性を見極めなければならない上に、追究したい分野を決めなければならない、学生としては、非常に難しい選択があります。ところがこの多様な国際学部のカリキュラムは、大学院に進学してみると、大きな学問へとつながる重要な種蒔きが、つまり学際的な場が、すでに用意されていたことに気がつきます。大学院ではそれぞれ分野が異なる方と、議論をしたり意見を交わしたりする学際的なシンポジウムや研究会などが多くあります。そのときに、私は、戸惑うことなく学部時代に培った知識をフルに活用します。もちろん、その知識というものは恥ずかしいほど大変浅いものですが、しかし、そのお陰で知的好奇心を失うことなく、他の分野への興味を持ち続け、さらにそこで新たに自分の研究の着眼点を見出すこともあります。国際学部の底力はここに一つポイントがあるのではないのでしょうか。

私が所属している東京大学総合文化研究科の比較研究室は、国際学部のように所属している指導教官のゼミによって、院生たちの研究テーマも様々です。ここで「比較文学比較文化分野」をもう少し紹介いたします。従来「国文学」と言われている文学研究の領域と、テキスト重視という研究方法においては、それほど異なっていないと思います。しかし、国文学が「国」という境界を離れることなく、内側に向けて語られてきたとするならば、「比較文学比較文化分野」は、境界を越え、人間の営為してきた、築いてきた文化の総体物、あるいは悩み続けた人間性の問題などを「国」に縛られることなく、語ることです。それは国に限らず、ジャンルにも広がります。例えば「絵画と文学」、「映画と小説」、「テーマ批評」の展開、「影響と交流」、「翻訳と異文化」など、多岐に亘ります。このような研究は、国際化の時代に大変重要な意義を持っていると思います。つまり、どこに変形や応用があるのか、そして潜在力と発展があるのか、それを究明し、再認識するのは大切なプロセスであり、学問を続けていく上で、基本になるからです。またこれは「比較文学比較文化分野」が一つの研究分野として成り立つ意義にもつながっていると思います。

さらに自分が携わっている研究分野への揺ぎ無い信念と誇りを持ち、無限に広がる知的好奇心と想像力を、学問領域の中で結集させていくことは、研究に自信がなくなるとき、あるいは、迷うときに必要な姿勢だと思っています。

(2009年3月25日原稿受理)

海外だより 03 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、グアムでご結婚された北島研究室 OG の津國若奈さんをお願いしました。紙面の都合で、次回以降に掲載します。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2009年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)今回は、中村 真研究室に在籍していた鹿島田千帆さんをお願いしました。

「私の研究」

鹿島田千帆

株) エフエム栃木 放送部 放送課長 鹿島田千帆
アナウンサー、ディレクター、プロデューサー業務

平成16年度入学 宇都宮大学国際学研究科修士課程
平成17年 同 工学研究科博士前期課程編入

知求会読者の皆様、こんにちは。鹿島田千帆（かしまだ ちほ）と申します。私は現在、社会人ドクター生として、宇都宮大学大学院工学研究科博士後期課程で音声・主にアナウンサーの声を研究しています。

研究の内容の通り、栃木県のエフエム放送局、RADIOBERRY のアナウンサーを本業としております。ニュースはもちろん、朝のワイド番組 BUP（月・火 AM7:30-11:00）車・レースの専門番組 MOTOR FREAK（土 AM8:00-8:20）のパーソナリティも担当しています。しゃべるだけではなく、取材に行きインタビューをしたものを編集して番組を作ったりするディレクター、プロデューサーなども勤めています。東京などの KEY 局と違い、放送に係わる仕事はたいていどんなことでもこなします。

大学生の頃に放送の仕事に出会い、20年以上がたちます。あっという間でした。それだけ毎日が充実していたのだらうと思います。そんな私がなぜ社会人の学生として勉強をしようと思ったのか。担当番組をはずされたことがきっかけでした。どこの放送局でも聴取率（テレビでは視聴率）をとりますが、担当した番組の聴取率が悪かったそうです。番組というのは、パーソナリティであるしゃべり手、つくり手のディレクター、音を調整するミキサー、そのほかに構成作家など、たくさんの人が係わって一つの番組ができますが、パーソナリティが責任を取られた形です。好きな仕事だけれど、本気でやめようと思ったのもこのときです。何がいけなかったのだらう。ラジオは耳から情報を得るメディアです。耳から入る情報がリスナーにとって適切ではなかったのか、心地よいものではなかったのか、そこにフォーカスした時に勉強することを決心しました。リスナーにとって心地よい声とは、しゃべり方とは。これが研究の強いモチベーションになっています。

そんな時、当時副学長だった粕谷 英樹 先生が音声の研究で成果を挙げているという記事を読み、即ご連絡し、お話をさせていただき、勉強をしたい旨をお伝えしました。粕谷先生から社会人修士のお話と、研究の手法として心理学からアプローチをしてみたらどうかというアドバイスをいただき、国際学研究科に入学し中村真先生のところで心理学について学ぶことになりました。心理学はほとんどの大学で文系にカテゴライズされますが、手法は非常に理系に近く、文系と理系を橋渡しするいわば鎧のような存在であると思います。ここで1年、中村先生と、片桐先生の有意義な講義を受講することができたことは私にとって大きな糧となっています。お2人の先生には感謝の言葉を述べても足りません。

その後工学研究科へ転籍することになりますが、当時の国際学研究科には博士課程がありませんでした。また工学研究科に比べて PC などの最新設備が少なかったのも移籍を決めた理由でした。現役の大学時代も文系だし、理系に転籍など無謀かと思われましたが、私を勇気付けてくださったのは現在も所属する阿山研究室の阿山みよし教授です。仕事と学業の二束のわらじでしたが暇を見つけては、院や学部生の講義に顔を出していた時、工学

部ものぞいてみよう、と、受講したのが阿山先生の認知科学の講義でした。阿山先生は色彩専門の研究者ですが、視覚・聴覚といった人間の脳のメカニズムについての講義は私の研究にも通ずることがあり思い切って阿山先生に相談させていただいたところ、「じゃあやってみたら」。この言葉を頼りに、転籍試験を受験し工学研究科に移籍することができました。このような転籍は宇都宮大学国際学部では初めてだったと聞いています。

しかし、喜んでばかり入られず、修士の単位はほとんど取り直しでした。単位取得のために C 言語の講義を受講した時は、まるで宇宙語が飛び交っているようで毎回冷や汗が噴出したのを今でも忘れられません。出勤前に 2 こまの講義を受けてから出社。当時生放送がなかったのも幸いしました。私よりも 10 歳以上も年の離れた現役の院生たちにも支えられ、修士を修了することができました。工学研究科はたいがい 10 人以上の学生さんがいますので、日々の大変な研究も楽しく行うことができました。

その研究室にもう 4 年近く在籍しています。来年の秋には博士課程卒業が迫ってきました。学位取得のためには学会への論文掲載、学会発表など様々なハードルがあります。毎回あきらめそうになりますが、そんな時、先生や現役の学生さんたちがぐいぐい引っ張ってリードしてくれます。学業は 1 人でやるものだと思っていましたが、最終的にそうだとすると、チームで取り組むからこそ最大の成果が挙げられるのだと思います。そのことを常に学び続けています。これは、私の本業にも直結するものであり、日々の仕事にフィードバックさせています。

今年の 1 月にはアメリカサンノゼで行われた国際学会で発表を行いました。昨年論文が学会誌に掲載され、あと 1-2 本論文を書く予定です。湧き上がるような学問への追究はまだまだ尽きることがなさそうです。

またプライベートでは、息子が今年高校 3 年生になり同じ時間を学ぶことで過ごす喜びを感じています。おそらく息子からみた母親はお弁当やご飯を作っている姿と、PC にむかい、研究資料をつくって 頭をかきむしっている姿だと思います。それもいいのかななんて。

夢はアナウンサー教育のための本を書くことです。そのときにはまたご報告ができればと思っています。つたない長文を読んでもいただきありがとうございます。

(2009 年 3 月 25 日原稿受理)

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第 6 期転籍生)

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い：**

住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 chikyukai@yahooogroups.jp
